

いなほ

第 20 号



1 9 7 3

桐 山 小 学 校

「いなほ」二十号を祝って

学校長 山田 克久

わが国では、男女とも生れて満二十才になると、成人として心もからだも一人前になったとみとめられ、一月十五日にはそのお祝いの式が行なわれます。

「いなほ」も誕生してから今年で二十号になり、人であれば成人の年を迎えたことにあたり、大へんめでたい年です。「いなほ」一号が生れたときの校長の飯田先生が、「この文集を読んでもと、その年の学校のよい思い出になり、学校の姿がありありと目の前に浮びます。よい記念、よい思い出になることでしょう。だから、この文集を大事にして、いつまでも保存し、時々取り出して愛読してもらいたいものです。」と書いておられます。

その頃小学生であった皆さんの先輩は、今はもう立派な大人になって社会のいろんな方面で活躍していらっしやいます。また、時々文集をとり出して、小さかったあの頃の自分のことや、学校の姿を思いうかべてなつかしみながらも、またこれからの社会のためにつくすはげましにしていられることと思います。

美しい夢や大きな希望をのせた文集「いなほ」二十号を通して、桐山の子どもは、いつまでもいつまでも、仲のよい友だちであってほしいと思います。そして、輝かしいあすの日を夢みて、希望の道を力強く進んで下さい。

目次

「いなほ」二十号を祝って

学校長 山田克久

作文

一年生	一〇四
二年生	五〇八
三年生	九〇二
四年生	一三〇一六
五年生	一七〇二〇
六年生	二一〇四二

表紙版画 六年 上品はるみ

おとうさんのしごと



一年 まつだ かずひこ

ぼくのおとうさんは、なめりかわのウオノミジウタンという、かいしゃへ、いつています。かいしゃで、ブルトーザーをつくっています。おとうさんは、かいしゃからうかえってくるのがおそいです。おかあさんが、車で、えきまでおとうさんをむかえにいきます。ガラッと、とがあたりたので、ねこかとおもって、げんかんにでてみると、おとうさんでした。おとうさんは、にっこりとわらっていました。かえってくる、と、ぼんをだまて、いっばいたがます。おかずも大きなおさうにいっばい、たべています。

ごはんをたべたあと、テレビを見ています。こんなおとうさんを見ると、いっしょけんめいはたらい、つかれてきたんだなあとおもいました。

うちのしごと

一年 おおた けいこ

わたしのうちでは、うしを飼っています。おとうさんとおかあさんが、くらいうちからおき

て、うしのうちをしばっています。うしはみんなで十八とういます。そのうち六とうは、赤ちゃんうしで、十二とうだけ、ぎゅうにゅうをしばっています。しばるときには、きかい二だいではばっています。

しばったぎゅうにゅうは、川に入れてひやかします。水がないときは、水そうの中に入れてひやかします。

ひやかしたぎゅうにゅうは、おとうさんが、まいあさ、ラクノにむけていきます。

そのぎゅうにゅうを、わたしは学校でのもでいるし、うちでものんでいます。

わたしは、くらいうちから、ぎゅうにゅうをしばっているおとうさんやおかあさんは、ひどくないのかなあとおもいました。

おかあさんのしごと

一年 ながしま ゆみこ



わたしのおかあさんは、ますえといいます。おかあさんのしごとは、みそをつくるしごとです。がっこうからかえると、おかあさんがいつも、しごとをしています。

しごとには、木でつくったきかいがあつて、その中へまめを入れて、みそをつくるのです。おかあさんがつくったみそのおいは、ちよつと

すっぱかったです。わたしは、そっとなめてみました。みそのあじは、とてもすっぱかったので、水をかぶがぶのみました。

たまには、はいたつにもいけます。わたしも、とさどき おかあさんといっしょに、じどう車でみそをくばりにいけます。

おかあさんのしごとは、なかなかたいへんだなあとおもいました。これからもおかあさんのおてつだいをうけてあげようとおもいました。

おとうさんのしごと

一年 いけはら ひでこ

わたしのおとうさんは、だいくさんです。おとうさんは、いそがしいのにねているときもあります。あさは、おべんとうをもって、げんきよくでかけられます。

「いってらっしゃいね。」と、わたしがいいます。すると、おとうさんは、「いってくるよ。」と、いいます。

また、いろいろなうちをたてられる、のこぎり、かなづち、くぎ、きりなどをもつがねれます。おとうさんのカバンを見ると、いろいろな道具がはいっています。

しごとからかえってこられると、ごはんをたべて

ひとやすみします。よるは、うちをたてるべんきょうをしておられます。

わたしは、おとうさんが、いえをたてているのを見るとき、すごいなあとおもいます。そして、つかれているのにたいへんだなあとおもいました。

ねこ

一年 よしだ たかのり



うちのねこは、からだが白とくろのねこです。このねこに名まえをつけるとき、けんかがはじまりました。ぼくは「チビ」、おねえちゃん「たま」とつけることにしたいのです。ぼくは、じゃんけんできめようといいました。やってみると、ぼくはグウ、おねえちゃん「ぱ」でぼくはまけました。なまえは「たま」にきまりました。

たまは、二年ほどいました。でも、二じゅうかんほどまえがういません。

ねこがいなくなつてこまることがあります。さかなのほねがいっぱいあるし、ねずみもたくさんいます。

子ねこは、もうわれていったし、「たま」もいなくなつて、さみしくなりました。

がっこうのがえり、ぼくのうちのねこに、よくにいるのを見ました。ぼくは、あのねこだったういいなあとおもいました。はやくかえってきてね。

詩し

はるがくる

一年 サミエともこ

はるになったら 花がさく。
どんな花が さくのかな。

チューリップ

ヒヤシンス

まだまだ たくさんある。

花の上には、

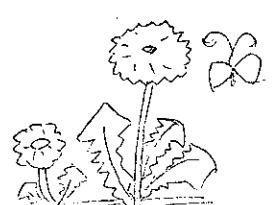
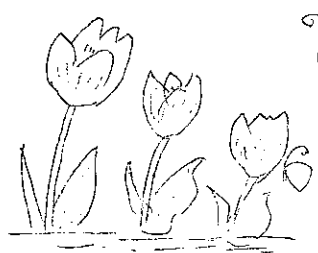
ちようちようがとまる。

花の中には、みつがある。

その ちようが

きつと、おなががへって

いたんだなあ。



ていでん

一年 なかだ あつし

土よう日に、学校で、ていでんがあつた。こまっていたら、

学校のベルのかわりに、かねがなった。

火じかとおもった。

とてもびっくりした。

四じかんのすこう

一年 たに口 みやこ

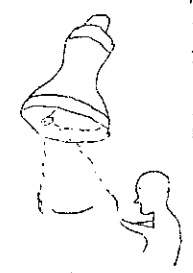
四じかんめになると、

すこうは、なんだろうとおもう。

かみはんが いいなあ。

ねん土も いいなあ。

わたしは、すこうが大すきだ。



ていでん

一年ながた にかし

ていでんは、きらい。

かみなりさんがくるから。

テレビが みられないから。

でん気がつかないから。

でん気ごたつが、つかえないから。

でん気ストーブがつかないから。

ぼくは、ていでんがきらい。

テスト

一年ながしま まこと

テストを もらうとき。

ぼくは、目をつぶる。

百てんを、とらんと。

うちから おいだされる。

なぜだろう。



テレビ

一年よしだ ただし

いつも セジになると。

おとうさんは、ニュースを見る。

ぼくは、まんがを見る。

そしたら

ぼくはしかられる。

どうして、しかられるのかなあ。

けんか

一年 あお木 としお

わたしは、いつでもけんかをする。

まさこは つよい。

わたしは よゆい。

でも、わたしたちは。

けんかをしないときもある。

いつまでも ながのよいきょうだいでいよう。



すずめ 二年 中島 忍
ぼくが、こたつに はいっている、おかあさん

が、

「おい、しのぶ あみないかい」

と大きなこえで いいました。ぼくは、

「なにー、なにー」

と いって 走って いきました。すると、ハウス

の中に すずめが ニひき パタ パタ と とび

まわって いました。

ぼくと、おにいちゃんが、ぼうを もって

「ホー・ホー」

と いって おいかけると、すずめは、

「キー・キー」

と いって とびまわりました。

ぼくと、おにいちゃんが、おかあさんの ところ

に すずめを とびしてやると おかあさんが、う

まく あみに いれました。

ぼくが、

「つかまえてよ」

と いって、つかまえました。しぬかとおもって

ゆるくもっている、とんで いきました。

また すずめが、おかあさんの ところへ とん

でいきました。すると、うまいぐわいに すずめが

あみの中に はいりました。

ぼくは、

「こんどこそにがさないぞ」

とぎゅっと 強く もって いました。その中

に もう一匹の すずめが あみの中にはいり

ました。ちやうど じゅうしまつのかごが あった

ので すずめを いれました。

ぼくが、おかあさんに

「すずめの えき なあに」

と きいて みました。

おかあさんは、

「こんかだよ」

と いいました。

こんなを やって しばらく みてみると、あは

れて、ちやうど ばかり いました。

ねるときは、ニひきとも 元気だったのに 朝、

おきてみると 一ひきしんで、いました。

ぼくは、

「おかあさん、一ひきしんだから もう一ひきのも

にがして やろうよ」

と いって、おかあさんが、

「はるになると 米くうがでわからんからはな

してやるな」

と いいました。

ぼくは、すずめが かわいそうだなあと 思いま

した。

学校から かえって、ぼくが すずめを みよう

と 思った。すずめが いません。ぼくは、いそ

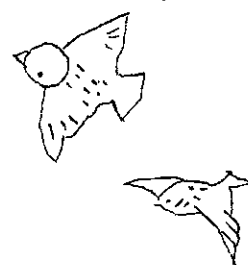
いで

「おにいちゃん、おにいちゃん」

と、走って いくと おにいちゃんが、

「にがして やった」

と いったので、ぼくは、ほっと しました。



学校から かえって みると、ねこが、いないので さがしました。やっと みつけたので、ねこを だいて わたしの へやに つれて いきました。

そして、そのよる わたしは、おかあさんに、「きょう、ねこを ねでもいい」と ききました。おかあさんは、「ねっしやい。」

と いいました。わたしは、ねこを だいて、じぶんの へやに、いきました。わたしは、ねこを だいて、ねました。でも、ねこは、わたしの足のほうに、いつて、ねました。わたしは、また、ねこを、だきました。

朝になったので、おきようとすると、ねこは、ベッドから、おりて、あやんで、いました。わたしは、ねこが、どうやって、おりたのかなあと、ふしぎに、思いました。

ねこは、あやぶとき、ねこは、すぐに、いけるので、いやになります。わたしが、ねこを、だこうとしたら、ねこは、わたしのふくに、つめを、ひっかけます。わたしは、それを見て、かわいそうなので、はなして、やります。そして、ねこが、ごはんを、たべてから、だいて、あやびます。

どうぶつ

二年 鍋谷 としひろ

しろ

はかを つくってやりました。でも、いまはもう家の下になりました。いまでは、土の中で、たのしくくらしているでしょう。

二年 坂東 透

ぼくは、どうぶつが、大好きです。ぼくの家には、どうぶつが、いないので、いつも、うちが、どうぶつえんだったら、いいなあと、思います。

ぼくは、はとぞ、かいたい。

と、いつと



「いつか、かあて、やるわい。」と、いつて、まだ、ぜんぜん、かて、くれないのです。

一九七〇年の時、ぼんこくはくらん会に、いったとき、

「絵あわせを、かて。」

と、いつて、いるのに、「あした、あした。」といつて、だまかして、とうとう、かて、くれませんでした。だから、はとも、かて、くれないと思ひます。

ぼくが、四オの時、犬が、しんで、一年たったころですが、二かいに、ふくろうが、とんで、きました。ねずみだと思つと、とりだ、とりだと思つと、かわい、まあ、目の、ふくろうでした。せんたくかごの中に、いれて、上に、バスタオルを、かぶせて、おきました。でも、家の中は、明るいので、三日ぐらいで、しんでしまいました。

秋のある日に、ぼくと、おかあさんと、おとうさんと、長野けんの、やわおんせんへ、いきました。そのかえりのことです。のどが、かわいたので、ちやうの、みせに、よりました。そして、ジュースを、のみました。

ぼくが、のんでいると、前から、ゴサ、ゴサという音が、きこえました。

いつてみると、くまが、バケツに、のつて、いました。ちやうど、ジュースを、のんで、はらいつぱいになったところだったので、ぼくは、ジュースを、くまに、やりました。

くまは、よろこびながら、ジュースを、のみました。くまは、ぼくたちと、おなじように、手にも、たて、たりながら、のみました。

ぼくは、ふしぎに、思いました。どうして、くまは、たての、むんだらう。

だから、ぼくは、いつも、ジュースを、のむとき、あのくまのことを、思いだします。

ぼくは、いつも、のどが、かわくと、くまに、のませた、名まえの、ジュースを、のみます。そうしたら、くまのことを、思いだします。

「ぼくが、朝ごはんを、たべていたら、しろが、キーン。」

と、なきました。ぼくは、そとへでてみると、しろが、いきました。ぼくが、さがして、いたら、おとうさんが、みつけて、くれました。しろは、田の中、に、いました。

しばらくしたら、だれか、きました。

「おーい。その犬、どうしたの。」

と、いつと、おとうさんが

「じこにでも、あつたのだらう。」

と、いきました。さわってみると、どこもけを、して、いないのに、キーン、キーン、ないて、にげまわり、おとうさんが、やつの、思いで、つかまえ、しろの家に、いれて、おきました。

「おかあさんが、ときどき、見に行つて、

「しろ、しろ。」と、いつと、しつぽを、ふって、いたそうなのに、八時すぎに、つめたく、しんでしまったそうです。

「白い馬」を 読んで

二年 谷口 正人

スーホさん、朝早くおきて、おかあさんを たすけて、ごはんのしたくを、するの、たいへんでしよう。それから、ひつじを、おつて、広い草原にいくのは、たいへんですね。ぼくだったら、できないと思うよ。

ひつじを、とりにきた、おかあみを、おいばらうと、つかれたでしよう。

白い馬にでたときは、一とうになつて、うれしかったでしよう。でも、王さまに、白い馬を、とられ、かなしかったでしよう。それに、白い馬は、ころされたから、くやしむでしよう。

ゆめの中にでてきた、白い馬の、いうとおりに、ことを、つくるのは、たいへんだつたでしよう。ほねや、かわや、毛を、つかつて、たいへんだつたでしよう。

けれども、このことを、ならして、いると、白い馬が、そばに、いるような気もちで、うれしいでしよう。あなたは、おかあさんおもうで、心のやさしい人ですね。

二年 上 島 ともみ

スーホさん、としを、とつた、おかあさんと、ふたりだと、さみしい、でしよう。

卓球大会

三年 中川 和 浩

二月五日に、卓球大会がありました。五時間目に、みんなが、こうどうに集まりました。ぼくも卓球の、せしめです。

はじめは、満くんと、政くん、とたたかいました。満くんは、ドライブが、うまいので、一つこみをやると、たいはいります。先生が、七本、ようぶこい、いました。政くんは、満くんのドライブの、つこい、みは、うけられないので、七本、ようぶは、すぐに、満くんが、勝ちました。

つぎは、女で、洋子さんと、恵子さんと、たたかいました。洋子さんは、卓球、せんしめ、を、えらぶ、とき、勝つたのに、こんどは、負けました。洋子さんは、ぜんぜん、そんな、顔をして、首を、か、げ、ながら、自分の、場所、へ、帰って、行きました。

そのつぎは、修くんと、聡くん、で、たたかいました。修くんは、一つこみ、ばかりで、聡くん、を、せめて、いき、ました。そして、修くんが、勝つと、おう、えん、して、いた、みんなが、わあ、わあ、と、さわぎ、た、で、ました。ぼくは、聡くんが、負けた、ので、くやし、く、た、まり、ま、で、した。

つぎに、早苗さんと、淑美さんと、たたかいました。早苗さんは、うつの、が、う、ま、かつた、ので、あつ、さ、り、勝ちました。早苗さんは、ぼくの、細な、ので、思、い、さ、り、は、く、手、を、し、ま、した。

おかあさんを、たすけて、いいですね。ひつじを、おつて、広い、草原に、でて、いくのは、ひどい、で、しよう。これから、も、がんばつて、ください。生まれ、た、ばかりの、かわいい、馬を、ひら、つて、い、です、ね。りつ、ば、な、馬を、も、つて、いた、のは、いい、け、ど、王さまに、と、られた、のは、かな、しい、で、しよう。でも、白い、馬が、か、え、つ、て、きた、ときは、う、れ、し、かつた、で、しよう。馬は、し、に、ま、した、ね。

ことを、ひくと、うつ、く、しい、音が、で、て、いい、で、す、ね。スーホさん、あなたは、心の、やさしい、人、です、ね。

きゅうしよくの、おばさんへ

二年 池原 みえ子

おばさん、まいにち、きゅうしよくを、つくつて、くだ、さ、つて、ありが、どう。

わたしは、おいしく、た、ま、り、ま、せん。なん、べん、も、お、か、わ、り、し、た、い、く、ら、い、で、す。

おばさん、わたしの、す、き、な、も、の、は、た、ま、ご、と、パ、ンと、ラー、メ、ンと、く、じ、ら、に、く、で、す。

おばさん、おし、ご、と、たい、へん、で、す、ね。まいにち、ひどい、で、しよう、が、が、ん、ば、つ、て、く、だ、さ、い、ね。

つぎに、栄くん、と、真くんと、始め、ま、した。栄くん、は、真くんの、つこ、こ、みを、が、う、た、れ、な、く、て、負、け、て、く、ま、い、ま、し、た。

つぎは、貴子さんと、聡美さんと、たたかいました。貴子さんは、はじめ、う、ち、は、聡美さんの、う、つ、た、ま、を、う、ち、か、え、す、こ、と、が、さ、ま、せ、ん、で、した、が、だ、ん、だ、ん、と、う、ち、が、で、き、て、六、対、五、に、な、り、貴子さんは、聡美さんの、う、つ、た、ま、を、う、ち、か、え、し、て、勝、ち、ま、し、た。

い、い、よ、さ、い、ご、に、な、り、ま、し、た。ぼく、の、ば、ん、で、す。なん、だ、か、お、お、か、さ、さ、さ、と、さ、ま、し、た。あ、い、ち、は、剛、く、ん、で、す。

六年生のしんはんの人が、れんしゅう一本といつたら、お、お、お、と、ま、し、た。練習が、お、わ、つ、て、し、あ、い、が、始、ま、り、ま、し、た。剛くんは、はじめ、か、ら、つ、つ、こ、み、は、か、り、出、て、ま、した、ので、ぼくは、後、ろ、に、さ、が、つ、て、う、ち、ま、く、た、と、う、ち、う、六、対、五、に、な、り、ま、し、た。ぼくは、心、の、中、で、一、勝、ち、た、い、勝、ち、た、い、と、思、い、ま、し、た。さ、い、ご、に、さ、い、け、い、一、つ、こ、み、を、出、し、て、ぼくは、剛、く、ん、に、勝、ち、ま、し、た。う、れ、し、く、で、う、れ、し、く、で、た、ま、り、ま、せん。

みんなも、大、き、な、は、く、手、を、し、て、く、れ、ま、し、た。く、ま、い、が、終、わ、つ、て、三年生の、と、く、を、聞、く、と、ぼく、た、ち、の、方、が、勝、つ、て、ま、し、た、ので、な、お、う、れ、し、く、な、り、ま、し、た。

来年、も、一、し、う、け、ん、め、い、練習、し、て、も、つ、と、も、つ、と、じ、う、ず、に、な、つ、て、ま、た、勝、ち、た、い、と、思、い、ま、し、た。

クリスマス会

三年上 島淑美

十二月二十五日に、三合だんき クリスマス会をしました。一時にはじまるはずだったのに一時二十分ごろにはじまりました。

はじめ六年生からうたをうたいました。うたをうたっている時に「ゴゴア」があたりました。とてもおいしいゴゴアでした。つぎに、部長の沢田さんがうたをうたっている間に、一つのみかんをまわして沢田さんのうたが終わり、みかんをもつていた人がうたをうたうゲームです。わたしは、あたるかと思つてどきどきしました。うたが終わり、たどき、四年生の子にあたりました。わたしは、あんしんしうしました。うたがムが終わり、つぎは、キーキがあたりました。おいしいそうなきでした。中には、ケチケチして、少しづつ食べている人もいました。キーキのつぎに、みかんやおかしがあたりました。おかしを食べるから、こんどは、自分たちでさなあそびをしました。わたしは、けい子ちゃんときとみちゃんとあそびさんとでトランプをしました。フタのしっぽやせんそうやババぬきや五十一などをしました。わたしは、勝ったり、負けたたりしました。負けた方が多かったです。でも、とてもおもしろかったです。すきなあそびが終わつてから、またゴゴアがあたり

りました。のみおわると、部長の沢田さんが「たのしかったですね。」と言つておわかれのあいさつをしました。みんな、一しよに帰りました。わたしは、歩きながら「ほんとに、おもしろかったな。」と思ひました。家へ帰つてから、おばあちゃんにクリスマス会の話を聞かせてあげました。

小杉にいったこと

三年前 田 清二

正月におかあさんと小杉にいきました。はじめにタクシーにのつて入せんまでいきました。入せんの町でプラモデルを買いました。くじのけんがさういふあたりました。いいのがあたればいいなあと思ひながら、くじを引きました。みんな六とうばかりでした。たいへんくやしかったです。それから、バスのりばへいきました。バスがなかなか来ないので、ゆかそばをたべにいきました。中かそばはすいていたので、すぐ食べられました。食べながら、バスにのつて小杉へいきました。小杉のうちへいったら、とうきょうのおじちゃんといのりちゃんがいきました。入せんを買ったプラモデルをつくらせてあそびました。よく動きました。

たこあけ

三年 坂東 保敏

きのう、よい天気だったので、ぼくは田んぼでたこあけをしました。あけていると、とおるちゃんも、あけにきました。

ぼくとおるちゃんとたこあけのさようそうをしました。あけていたら風が強くふいてきたので、よくあかりました。ぐんぐん風をきつて空へあがっていきます。どんどん糸を長くしたら、もつと高くあかりました。とおるちゃんのたこは糸がみじかいからよくあかりません。ぼくのたこは、えらそうにいはうて、どんどん、どんどん、あがっていききました。そのうちに、たこのしっぽが、されて、みじかいしっぽをふりふり、たこは、おりにきました。それで、ぼくは、しんぶん紙のしっぽは、よくされるので、こんどは、しんぶん紙にしました。とはして見たら、ちようじよくあかりました。また、とおるちゃんのたこは、さようそうしました。二つのたこは、上になつたり下になつたりしていましたが、とおるちゃんのたこは、ぼくのたこのひもに、もだかりました。ぼくは、いっしよけんぬいにひもをひっぱりました。あんまり強くひっぱったので、ぼくのたこのひもは、とちうでされました。そうしてたこは、ゆらゆらと、たんぼへ、とんでおちてきました。だけど、とおるちゃんのたこのひもは、さ

れませんでした。とおるちゃんのたこは、「こんどは、ぼくのかちだ。」といつたような顔をして、あがっていました。ぼくは、糸をまいで、たこあけをやめました。

給食のおばさん、ありがとう

三年 長島 貴子

おばさんの先つてくださる給食は、とてもおいしいです。わたしは、すきさらいはせんせんしませんが、きうがぶな子になりたいから、さらいでもがまんして、みんな食べます。だから、このごろは、さらいなものはなくなりしました。これは、みんなおばさんのおかげです。給食のおばさん、ほんとにありがとう。給食室には、ストーブがあるけれど、あんなに広いところだから、さむいでしょうね。だいこんやにんじんをあらったり、おぼんやおちゃんをあらったりして、きうめたいでしょうね。かぜをひかないようにして、おいしいさゆうしよをたくさん作ってください。わたしは、これから、すきさらいをしないで、なんでものこさず食べて、元気な子になりたいと思つています。

雪のふった朝

三年 水越 栄仁

あさ おきて、
まどを のぞいたら
ちやちやちやと 雪がふっていた。
からだは さゆうに 寒くなった。
「ぶる ぶるっ。」とふるえた。

手の上に 雪をのせたら
すうっ と けて 水になった。
ぼくは 寒くなって こたつへ もぐりこんだ。

ねこ

三年 長島 伸一

ぼくのうちは 耳と足のところは茶色で、あと
はみんな白い毛をしたねこがいます。
ぼくは 学校から帰ると、すぐねこをあそびます。
妹のゆみ子もねこがすきなもので、ときどきねこ
のとりあいつこをします。ねこをもつて 家の中を
走り回ります。ねこも、よくこんで 手の中から
にげだして、いっしょにびやれながら走り回ります。

この間、ゆみ子は、ねこのひげをみんなぬいでしま
いました。ねこは、ひげのないねこになつてしま
いました。そして、ひげがなくなつてから、ネズミ
もとらなくなりました。ぼくは、「ねこにひげがない
と、ネズミはとれないのかなあ。」と思いました。

トランプあそび

三年 前田 清春

小杉のしんせきの家で、東京のよしのりちゃんた
ちといっしょにトランプをしてあそびました。さい
しよに「ばばぬき」をしたら、ぼくはさいごになつ
てから「ばば」があたり、げっとうになりました。
ぼくは、くやしがつたので
「もう一回、やろう。」
と、いってやりました。みんなもさんせいしたの
で、またすることになりました。はじめは「ばば」が
こなかつたのに、とちゅうでまた「ばば」がさまし
た。ぼくは「ばば」をかくして、トランプをやりま
した。そうして、せいじに「ばば」をとらせるよう
にしてやりました。せいじは「ばば」をとつていさ
ました。せいじはへんな顔をしました。そうして、
こんどは、ぼくが一つとうになりました。たいへんう
れしかつたです。

たつきゅう大会

四年 中島 憲一

二月にはいつてから間もなく、たつきゅう大会があ
った。場所は講堂で、二年から六年までだった。
いよいよし合が始まった。

須沢君が、好逸君に勝ち、恒子さんのり子さんに
勝ち、とおる君が浩幸君に負けて、ぼくの前、和美さ
んの番がきた。

恒子さんか、

「ありね、和美さんとあんたが勝ったら、わたしは
ちの勝ちだぞ。」と教えてくれた。それをきくと、
ぼくは、心ぞうが、どきどきとしてきた。

和美さんが、広子さんに勝って、ぼくたち赤組は、
三たい一でリードしている。

ぼくと対する相手は、悟君だ。ぼくにとってはきこ
わい相手だ。それは、悟君が、四年生のほんしや板と
いわれるほどねばり強いからだ。

一回戦が始まった。はじめは、四対二でぼくが負け
ていたが、後半で追い上げて六対五、その時負けるか
な、と思ったが、調子にのつて、七対六で勝った。

二回戦が始まった。こんご、負けるな、と思つ
た。それは、五対二と、あつとう的に、君島君が強か
つたからである。だめだと思つたのが、何本もはいつ
て、とうとう、五対五の同点になった。

ぼくは、きんちようし過ぎて、一つこんだが、はいら
なかつた。六対五になつてどきつとした。でも、おち
ついて七対六でぼくが勝った。

ぼくは、ぼつとした。そのあと雅代さん、長島君が
負けた。でも、ぼくが勝つたので、四対三で赤の勝ち
になった。みんなが、

「おまえやったな、やったな。」と、頭をたたいたり
せなかをたたいたりした。

白の方では、悟君に、
「おまえ、だらやな。あんなやつに負けて。」と、く
やしげな声がかきこえてきた。

講堂から帰る時に、斎藤君が、
「よかったなあ。よかったなあ。」とほめてくれた。

教室に帰って遊んでいると、先生がこられて、
「赤組の現状と、組合あせと勝負を書いた紙をけつて
下さい。」とおっしゃったので、けいじ係のおる
君が黒板に貼った。

ぼくは、それを見た時、やっただな。と思つた。

おばあちゃん

四年 青木 真澄

うちのおばあちゃんは、もう七十二です。おばあ
ちゃん、年をとっていますか、いっつも元気です。四
ギロメートルの寺までも歩いていきます。
おばあちゃんは、とてもやさしくて、



「きょう、寺のかえりに何か買ってきて上げつちや。」
「行って寺へ行きます。」
学校から帰って、腹がへると、

「そこに食べるもんおいといたぞ。」
「と言って、おかしやおにぎりくれます。夕飯の時
も。」

「好きなもん買つてらっしゃい。」
「言います。私が、店から帰ると、そういしたり、
夕飯のしたくをしたり、いそがしうに働きます。
私は、どんなおばあちゃんを見るこ、ひとりで元氣
づきます。」

夜ねると、私は、すぐふとんをふんぐつたり、ふ
とんからはみ出して、たみでねたりします。すると、
「すみ、いいかにしてねよう。」
「言いに、わやわや起きて、直してくれます。私は、
「そんなに働いてばかりいたら、からだかよわらん
かなあ。」
「と思います。」

私は、おばあちゃんか、大好きです。おばあちゃん
いつまでも永生ぎして下さい。

しけん前の兄

四年 長島 聡

一月の始めごろから、中学三年の兄が、入学しけん
だというので、いっしょうけんめいに勉強し始めた。

「ぼくは、お母さんに、
「兄が何してるの。」
「と言うと、」
「しけんが近づいたから、いっしょうけんめいやって
いるんだ。」
「言った。お父さんは、毎日、兄ぎに、
「勉強やつとるか。」
「言います。兄ぎは、
「やつてるよ。でも、何言わよよけ。」
「いつも言います。でも、お父さんは、家へ帰ってく
ると、すぐに言います。ぼくは、うるさいので、二階
へ上がります。どうして、お父さんは、いつもおこる
のだろうと思います。たまに、ぼくに向って、
「兄ぎのようす見てこい。」
「言います。ぼくは、
「やつとったよ。」
「いつも言います。」
兄ぎがいつもおこられてばかりいるのでかわいそ
うになってきます。お父さんに言いたいことがあるけ
れど、こわいので言えません。それは、
「お父さん、兄ぎにそんなことばかり言っていたら
やる気がなくなるから、自分の好きな通りにしとけば
いいんだ。」
「ぼくと兄が少しでもプロレスをやっていると、すぐ
におこります。ぼくは、いやだなあ。」と思います。だ
けど、ぼくも悪いと思います。それは、しけん前の兄
ぎなのに、遊んでいいると悪いからです。ぼくは、でき

るだけ早くしけんが終わらないかなあ、と思います。だ
から、いつも一人で遊んでいます。
ぼくは、兄ぎが、はやくしけんを受けて、合格して
ほしいと思っています。



自転車乗り

四年 谷口 広子

二月の中ごろ、家に帰ったときのことでした。
妹のみさ子が、庭で自転車のけいこをいっしょうけん
めいにしていました。私は、かばんを袋におくなり、
みさ子の自転車乗りを手つだつてやりました。けれど
も、その時は、夕方だったので、少ししかできなかつ
たから、

「あしたまた、けいこしようよ。」とみさ子が言った
ので、毎日することにしました。
つぎの日、学校から帰ってくるなり、けいこを始め
ました。そろんではかりいましたが、何日かたつたあ
る日、いつものように練習をしていると、すこしふら
つきながらすメートルぐらいいきました。その時は、
自分の事のようにうれしくなりました。みさ子も、う
れしそうに、晴れ晴れとした顔をしていました。それ
を五回ほどしました。

つぎは、カーブのところで曲がる練習をします。カ
ーブのところでは少し持つてやりました。つぎに持つ
のをやめてみると、すぐにできました。

ひとりで家の前の道まで行くことにしました。そこま
でに曲りかど二か所あります。カーブのところでは、止
ったり、ころんだりしながら乗って行くと、どうにか
家の前まで出られるようになりました。
つぎの日、おばあちゃんの家の方から、たかしの家ま
で乗れるようにしようと思いました。その時、わたし
自転車に乗って行きました。でも、かずひろの家の前
までくると、すぐ足をつくのので、
「あんまり、足をつかんと乗らっしゃい。」
と注意をします。やつと、たかしの前の方まで乗れま
した。

わたしは、家に帰ってからみさ子に、
「きょう、和美ちゃんちに、遊びに行こうよ。」
「と言うと、みさ子もさんせいしためで、和美ちゃんち
へ行きました。わたしたちは、外で自転車で乗って遊
びました。和美ちゃん、仁子ちゃん、みさ子、つよし
君、わたしの五人で、一台の自転車に乗ろうと思い、
いろいろ考えていると、やつと乗れました。しかし、
よくこげないの、やめて帰りました。

今も、すこしずつ練習しています。わたしは帰るこ
ろ、みさ子は、自転車で乗って、わたしをむかえにき
ます。そして、みさ子もつとじようになつたら、
少し遠い所へ遊びに行こうと思います。

ソフトボール

四年 扇原 和美

きのうの、三時間めが終つたとき、先生が
「外か天気だから、四時間めは遊んでよし。」
とおっしゃったので、みんなはうれしくて、

と、大きな声を上げました。長島君が、ソフトボールをやろう。と言ったので、みんなでやることにした。外へ出て、じゃんけん、勝ち負けに分かれて、しあいを始めました。

わたしたちかしゅをしていた時、長島君がフライを打って、そのボールを追いかけて取りに行つたけん一君が、走りながら、ベースにつくと、長島君が、つひろゆき君のからだにボールをつけなかったから、セーフだよ。

と言つと、のり子さんが、
「だからだよ、わたしがアッてシマウ、
と言つたので、けんかになつた。」

そこで、見ていた技能学校の人に聞いてみると
「今のはアウトやったよ。」
とおっしゃったので、わたしたちの組は、
「わあい。」

と大声で喜びました。すると、相手の人たちが「今のセーフやったよね。いんちきや。」と小さな声でいっていました。それから、しあいをしています。

「長島君がいると、いやなことを言うのでいやだな。ちやんと、きまつてしまつてから、まだ、もんくを言うのは、よくないことだと、思いました。」



卓球大会

玉年長息女

二月二十五日（日曜見）九時から、入善小学校で所の卓球大会がある。ぼくたちは朝八時に家を出て、桐山小学校で少し練習をしてから、入善小学校へ向かった。講堂に入ると、みうと小學生、中學生、大人の人大で、もういっぱいになつてゐる。練習を見てゐると、送つた子ばかりで、少し心配になつてきた。試合は団体戦から始まつた。最初の相手は飯野小学校である。二対二の後、治勝君が勝つて津波勝に進むことになつた。相手は舟見小学校。堅固ではあるが、舟見は強いが、かゝればよい。といふけれど、今度は勝者を多くと、憲二君がトッパつた。第三局、治勝君が勝つたが、女子は二人と子敗けてしまつた。最後の試合は正始君が勝つたが、聞くとも駁れて、夫勝には進めなかつた。

「三位になつたからいいや、ちがひな
と云つて笑つてゐた。ぼくらに勝つた舟見小次郎は、周
付戦一位になつた。舟見はやつぱり強いなあと云つた。

「国体戦のあと個人戦が始まった。先生は「孝志、来年のこともあるから一度出てみよう」といわれた。ところが相手は国体戦に正対者が、こてんぱんにやられた。母見の徳光君と聞かされて、かうくりき

温泉へ行ったおばあちゃん

四年 池原 智

この間、おばあちゃんか、境の温泉へ行って、何日か泊っていましたので、お父さんと、みえ子と、ぼくと三人でむかえに行きました。

おばあちゃん、まだおりたいから、帰らない。と言ったので、ぼくたちだけでもどりました。

それから二、三日して、もう一かいむかえに行きました。すると、おばあちゃんば、みんなも、お湯にはいりたいたうから、一日泊って行けよ、と言われたので、ぼくと、みえ子か泊り、お父さんだけが、家へ帰りました。

その日は、お湯にはいり、ゆっくりわたので、たいへん気持ちよかつた。

つぎの日朝早く目をさますと、たいへんよい天気です。きれいな空がまどから見えしました。午前中は、みえ子と、へやで遊んでいましたが、おひるに、ちゅうかを食べてから、あまりにあたたかい天気なので、みえ子と海へ行くことにしました。

温泉から海までは、三百メートルもありません。ハ号と、鉄道をこすと、玄々とした海が続いています。ひろい砂はすで、貝をさかしたり、きれいな石をひろったりして、楽しく遊びました。

それから、温泉へ帰りましたが、冬だと言うのに、暖かくて、ほんとうに楽しい一日でした。

で、いふに、一セツトありは、**ニヤンケン**と勝つてサッブを
胸がどきどきして来た。**ニヤンケン**に勝つてサッブをも
らうた。一セツトありは**リ対**んで敗けた。二セツトあは、**ク**
カもまで勝つてゐたのに、それから逆転されてしまつた
ので、さくやくしがつた。それでも正弌者よりミスア
が衰へつたやうで少し自信がづつたような気がする。

サナは、けやけと敗けてしまったが、男子では寛二君と若勝君が共に逆走、膝まで残した。二人のうち寛二君が逆勝堂に進出した。相手を圧くも、正和君も、若勝君も敗けた。自身の徳光君である、ぼくらのカタキを打ってくれればいいなあと思つて見つけた。一セツトは敗け、ニセツトが膝立ち、まひよミセツトめになつた。寛二君が点を取るとぼくらがフーノとツツてをえんした。しめしついに片討で敗けてしまった。

ヤがて、詞々が全可経より表しよう、式が始まつた、丹
見は国行儀、も個人儀（男、女、老）も一位だった、何くは来
年まで脂つてみでるぞと、思ひながら、表しよう、式を夏て
いた。

二月十四日のこと

五子祀

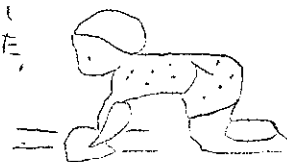
今日は土曜日で、先生は出で、かうかやうなり、一時間めは詩の暗しうなので、暗室に坐著してゐると、牧頭先生がこゝれた。坐著が途はずりうた時、牧頭先生は、「詩というものは味やつて読むことが大切である。」

二時間めに入つて算科の宿題の答えをあげてゐると停電になりました。しばらくすると電気が通りましたが、すぐまた停電になりました。今日は雪が降つて時に寒さがあるので休み時間には、みんなストーブのまわりで本を読んだりしました。

四時間あげテストでした。後食のあと和がでたりので
そうじをせずに帰りました。停電になると寒くて困るけ
ど、そうじをしなくてもいいので、悪リニとばかりでは
なり方と思ひました。

五年
上
皇
裕
元

あとがたづけが終つて、二人共息強に
としてゐると、お兄ちゃん「
「二階のううじせい」
と叫びました。」



ニ人ともそういはしたくなかつたけど、しなりとおえちやんがおこると思つたので、おとふ姉ちゃんとはりやりやそうじたとリカがりまいた。

分とそうしし。さらに階段のさうじをいたしました。お兄ちゃんも三郎と洋間とさう下のをうじをしました。そのあと三人で、さう下と洋間と台所とお兄ちゃんへのやとにすべる薬をぬりました。

それが終わったころはもう十二時近くになつてゐたので、昼ごはんを食ふまつた。食へて少し休んだあと、そうじしたのをからみ込んできれいになり、黒い薬をぬりつけた。

終つてしばらく経んでゐると、夕ごはんになつたので、草をすくた。一生けんみん働いたたあが、夕ごはんは太変おもしろいのです。それが「ミラビ」を見て見たら、とても暖かくなったので、おとんの虫へ入つてみました。

おとづんの手伝い

五
谷
洋
布

「ぼくは、おとうさんに呼ばれて来てみると、家まで番
たきな木が、切り倒されていた。」

おとうさんは、

「この木の枝をみんなわけてあげ。」
といつたので、ぼくは木の皮を切りやめた。上の才を向
けてゐる枝は、軽く切れたが、下の才を向けてゐる枝は
なかなか切れなかつた。そこで、おとうさんに手伝つ
てもらつて、木をうらがえしにしてもらった。

校を全訂切つてしまつたが、おとうさんはほかの木を切つて、また、ぼくに「この木を切つてみろ」。

[illegible]

こんどは、のこギリで切つてゐると、左側でとて
も切りにくい。きつてまた、右でつとんにがへ、アそこ
つた。大分切つてゐるアツには、もうすぐ倒れてうにな
たので、よいて倒した。

「ほくは、その木の根を、うちやめると、けり、さういふゆゑに、はうまいたまふ薬に付いた、

江戸のへや

五五五



多くのへやには二階の北側にあります。
 物置きだった所を二年の静さとしあつた
 うさんに頼んで、多くのへやに作り直して貰つたの
 です。

入リ口から見るとすぐに本體が現れる。あまり本體がバラバラにしてゐたので、三年はごろごろとゆきこんで、正つに区切つてある本體を度つてゐるのです。

一 煮下の段は、百舞神樂とマンザの手が入つてあり、二段目は番話の手が入つてります。ぼくは、はじめは、あまり話者は好きではありませんでした。しかし、あとうさんが買つてこられた本を読んでみるうちに、いつの間にか本が好きになり、今ではよく自身が本を讀むに行つてゐます。

金太郎通水

五
斗
中
原
布
子

十日の夜は雪が降りてとてもさむかった。

稲場 睦美

わたしは、おとなになつたら、多くの飾物を作つたり、川をぬいぐるみなどを作つて、それを売るために、一つの店を開きたい。
また、飾物、ぬいぐるみなど、今の世の中にならぬものも作って見たい。
しかし、おだんが、高いとお客さんが買つてくれないので安くして、おとなや子どもによろこばれるようにしたい。

池原 彰夫

ぼくは、自分で作った船で世界一周してみたい。
まずはじめは、日本から太平洋に出て、大西洋までわり、それからインド洋を回つて日本へ帰る。回るとちゅう、いろいろな国に立ちよつて、その国々の民芸品を買い、帰つてからみんなに分けてあげようと思ひます。航海のとちゅうでエンジンがこしょうして、ひよう流するかもしれせん。それで、ぼくは船で世界一周してみたい。

吉田 京子

わたくしは、看護婦になりたいと思ひます。

藤田 真美

わたしのゆめは、ファッションデザイナーになることです。

デザイナーになつて、いろいろな服を作つて、人々に着てもらい、気に入つてもらふことが、何よりのお楽しみです。

そして、世界中にわたしの名前が知れわたつたり、各国のデザイナー達を日本に集めて、ファッションショーを開きたいと思ひつています。

松田 学

ぼくは、将来は政治家になりたい。

現在の日本は、みんな知つてゐるやうに、大気汚染、その音などの公害問題や、国民福祉に対する政策が充分でない、非難されてゐることを知つてゐるやうに。

そこで、このよう日本にしたくないためには、日本の政治を完全に、たてなおさなければならぬと思ふ。産業がどんどん発展しても公害が出来るやうにして、アメリカを追いぬき、世界中で一番豊かさを国にしてみたい。

そして、国民に信頼され、頼りにされる日本がはんだ「世界の松田」と、いわれるくらいになりたい。

看護婦になつたら、交通事故でけがした人、病気で苦しんでゐる人と、医者と協力して、なおしてあげたいと思ひます。いっしょにけん命勉強してやりたい。

鍋谷 浩志

ぼくは、やがて、自分の力で日本一周の旅に出たい。そして、日本中のの人々と友達になる。旅行中は毎日、日記をつける。

その日記は、おそろく、ぼくの人生のうちでも、一番大切な宝物の一つになるやうに。

池原 栄子

わたくしは、しょう未美容師になりたい。わたくしは、小さい時から、かみの毛をいじるのがとても好きなので、一日に何回もかみ型を変えたりしています。それから、いろいろな人のかみの毛をきれいに、ゆつてあげたいからです。

長島 修

ぼくは、将来ブラジルへ行き、密林を切り開き、大規模なしくみで、カカオや花を大量に生産し、日本をはじめ世界各国に輸出したい。お金がたまると、現在の農園をもつと広げて、その地方の人に分けてあげたい。

西島 晴美

わたしは、卓球の選手になりたい。

いろいろな卓球選手と戦つて、うでを鍛へたいと思ひつています。また、その時の選手たちと仲よくなつて友達になりたいと思ひつています。

前田 実二

ぼくは、ちやうとした仕事を会社を作つて、仕事をやつて、お金をたまるやうな会社を大きくして、かつ、お金をもらつたい。

そして、世界中に別荘を建て、美人と結婚し、ごうかを生活としてみたい。

長島 美穂

わたしは、大きくなつたら看護婦になりたいと思ひます。

看護婦になつたら、家の人が病氣になつても、少しは役に立つかもしれない。それに、どんな種類の病氣があるかも、わかるからです。

鍋谷 昭仁

ぼくは、大人になつたらオーストラリアの広い牧場

で、羊や牛など、いっしょに牧場さかけ回ったり、追いかけたりしたい。
それから、羊や牛の頭数などいふやし、羊毛や牛の肉や皮を売って、日本へ帰って来る時には、大金持ちになって来たい。

稲場 見

ぼくは、後行士になって空を自由に飛んで見たい。上手に飛べたら、世界一周旅行をし、世界一の建造物の周りとまわって見たい。

須沢 ゆう子

わたしは、大きくなったから、人にすかれて、やさしく、しかも親切な花嫁さんになりたいと思います。また、人にえらいず、自分の事は自分でし、二人で力を合わせて生活していけるよう、お嫁さんになりたっています。

松田 務

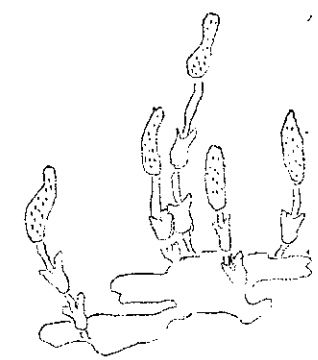
ぼくは、将来、東京大学の医学部へ入学して、みっちり学問をし、それから卒業しても研究室に残り、博士号を取り、学者になりたい。
医学の学者になって、ノーベル賞をもらい二十

青木 まさみ

わたしは、将来、美容師になりたい。
美容師になって、誰でもの髪をきれいにし、やわらかいかみにするために、シャンプーの仕方や、食事の仕方を教えてあげたい。
また、その人の顔形にあったかみ型や、おけし、うの仕方も教えてあげたい。

松田 裕子

わたくしは、世界一周をしたい。
それも、一番短い時間で一周できるように、飛行機の発着時間を調べて、一周する。
また、ゆつくりと世界の各国を見て、色々な人と友達になり、その人達とペンフレンドになりたい。



一世紀の医学の基を築いたと云われるような学者になりたい。
それから、また、日本医科大学を創立するの、いいと思つた。
そのために、今から一生けん命勉強しようと思つてゐる。

神子沢 修

ぼくは、病院の院長になつてみたい。
それから、いろいろな人達の病気を治してあげて、みんなが喜ばれる人間になりたいと思つてゐる。
また、病院だとお金がかかるし、いろいろな人達と、つき合ひがでさるからです。
でも、病院の院長になるためには、頭もよくないといふので、それに金も必要なので、今から勉強をしてお金もたためたいと思つてゐます。

沢田 若勝

ぼくは、会社につとめて出世したい。
しかし、そんなことだけではつまらないので、お金をためて、全国旅行をしたい。

卒業記念文庫



サッカーの試合

沢田 若勝

八月三日、ぼくたちスポート少年団サッカーチームは、富山のサッカー場へ試合に行つた。
試合場に着いてから、ほかのチームの試合を見ていた。どのチームも、みんな上手だと思つた。ぼくたちのチームは、一番最後の試合で、不安だった。ぼくたちの試合が近づいて来たので、ランニングとパスの練習をした。
いよいよ試合の時がやって来た。谷口さんが、がんばつて行けといわせた。ぼくたちは、田嶋を組んで、気合を入れた。
いよいよ前半戦が始まった。キックオフは、相手側だった。
ゴールは、試合開始、相手がゴールをきつた。ぼくたちは、よそ見をしてたのか、たちまちゴールがわで、もみ合つてた。第三番がボールをキヤツクしてくれただけで助かった。でも、今の攻めはすすがしかった。思つていたより、相手が強かった。ぼくは、こうなつたら、がんばるべきではないかと思つた。

「ボールが味方にパスされた。ぼくは、フォワードだったので、一生けん命走った。ボールが、ぼくのすぐそばで来た。ぼくは、すぐに取りに行こうとしたが、相手の土俵がすぐにボールを取って、味方にパスをした。ぼくは、くやしくてたまらなかつた。」

そこで、ぼくは、七番までついで的にマークしようと思つた。味方のバックとハーフ、相手のフォワードとが入り乱れた。ぼくは、これではいけないと思つて、あまりかたまると言つたが聞えないうらしかつた。と、思つたとき横にボールがとび出し、つっこんで来た相手がシュート。早くも点を入れられてしまった。相手が一点を入れたので、よろこんでハッスルをしている。しかし、ぼくららは、かつくりしていた。相手のペースにはまつたようだ。

試合続行味方がボールをけつた。ぼくは、けん命に走った。谷口さんが声をかけていけと言われた。ボールが修君にパスされた。始めての攻めきだ。修君から彭夫君にパス。ゴールの方へける。正弘君がつっこんでシュート。おしくもゴールキーパーのひびに当つて点にならなかつた。ひびに当つたボールをぼくが、とろうとしたが、すぐにけられた。この攻めきは、おしかつた。

「前半戦終了、一対〇でリードされた。ハーフ時間なんとなく、みんな元気がなかつた。」

すると、おばあさんは

「若い者が、そんなことを言つていたら、年よりになつたら、どいかになるのよ。」と、言われた。

そこで、一休みの意味で、犬を連れて来た。いたずらなチーフは、大根畑を運動会として、せつかくの大根畑を、あらすので、少しの間、なぐことにした。

それから、また大根取りを始めました。今度は急いで仕事をしました。何時間かすると、大根の仕事を切り落す仕事が終わった。

今度は、大根と納屋の前へ運び仕事をすることにした。チーフも、いっしょに仕事をしました。チーフの仕事は、大根を積んだ一輪車と、わたしといっしょに引っぱることです。チーフの引っぱり方は、横に引っぱるので思つたように動かせなかつた。

大根を全部納屋の前へ運んだら昼食にした。大根取りと手伝つたので、好きなラーメンをこしらえてもらった。

お昼から、大根運びをした。

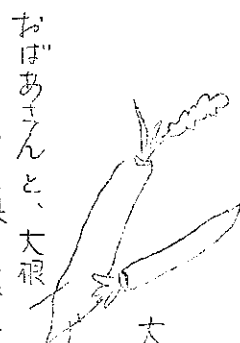
わたしは、いすに坐つて洗つていたのだが、あまりしたことがないので、腰が曲つて、起き上がる痛くて立てないくらいでした。

わたしは、おばあさんは痛くないのだろうかかと不思議でたまらなかつた。

谷口さんが、声を出していけといわれた。ぼくららは、「オー」といって元気になった。

後半戦が半分ほどすぎた時だつた。相手がいいパスをして、シュート。これもはいった。二対〇のリードされた。ぼくは、一点をいれるんだと心に決めた。それから、声を出してぼくらも相手も必死だつた。それからは、待ちに待つたチャンスが来た。修君が、うまく持つて来た。正弘君にパス。修君がつっこんで、ぼくもつっこんだ。ゆるいシュートだつた。ゴールを撃つていたバックの方にいった。ぼくは、つっこんだがすてにおさかつた。

それから、むっしに攻めたが、結果は「二対〇」で負けた。ぼくは、残念だつた。しかし、思ふぞぶんあはれたので、くいのない試合をしたと思つた。



大根とり 長島 美穂

おばあさんと、大根とりをした。十一月二十日の日曜日に、

始めは、大根を葉と大根に分けた。大根をぬいて見ると、あまりにもたこの足みたになつていたので、それとつけ大根にした。ひとつね終つたら、腰が痛くて、まっすぐに立つていられなくなつた。

おばあさんに「ねえ、腰が痛いからちょっと休ませて」といった。

わたしは、休みながら大根を洗つた。しばらくすると「とも子さん」のおばあさんが来られて、話しをしてもらった。

話しをしてもらった間、チーフとぼくはなして遊んだ。すると、そこに「とも子さん」の家のねこがいた。チーフは、ねこより弱いのので、わがわがしていた。チーフが横を向いている間に、おこけチーフの足がめがけて追つたので、「キャンキャン」と、なきながらチーフは、にげた。

すこし遊んだから、また大根を洗つた。

きょうは、仕事をしたので、夕飯がおいしかつた。これから、仕事をしようと思つた。

二十一世紀を想へて 前田 憲二

二十一世紀になると、八幡町、朝日町、宇奈月町が合併して東金市になります。

海軍には、大工場がいくつも立ちあがり、農産物から工場までと変つていくこととしよう。

しかし、公害など全くありません。汚水は貯水せうにためておき、きれいになった水だけを海へ流す。じょうかそうちも完備しているし、工場から出るそう音も音を吸収するそうちも作られています。

住居地は、完全に工場地帯から分離されています。しかし、通勤時間になると、マイクローバスが送り迎えをし、もちろん料金は無料です。

労働時間七時間制になり、週五日制になっていくが、給料も高くなっている。

このようになる、市民生活も豊かになり、いい家に住んで、太陽電池からの電気で、テレビを見たり、電マレンズで、食物を作ったりしています。

また、自動車のかわりにエヤーカーが走っており、排気ガスにやまされることないでしょう。しかも、このエヤーカーは自動的に走るの、交通事故の心配は、全くありません。

だから、ここ一、二年間の交通事故件数はゼロです。

小さな城

松田 裕子

わたくしに、とつぜん幸せなことがおこりました。

それは、自分の部屋、つまり小さな城ができたということなんです。

六年生になって——と、考えるとおそいような気もするのですが——

小さな城は、三じょう間ですが、わたくしにと

新しい家の窓から

島

浩文

ぼくの家は、二階建ての新しい家になりました。ぼくの部屋は、二階の北と東の方向に面したところにありました。窓も北と東にあります。

冬になったので、寒い二階の部屋にあまりくるともありませんが、正月も近くなるので、ちうがつているものをかたづけようと思つて、部屋に入つて見ると、姉が窓をふいていました。

その日は晴れていて、とてもいい気持ちでした。

東の窓を見ると、雪をかぶった朝日、白馬岳などの山々が、とても雄々しく見えます。

また、朝日連山の麓に小川橋やドライブイン、国道を走る車などが見られます。道を歩く人、木、家、また、物ものなど、いろいろ見えます。すべて、太陽の光を浴びて光かがやいています。それは、まるで生きているようです。

一す、北の窓からは、鉄道とみえり、青い海が見えます。耕地整理で沢村を切ったせいか、横山小学校がすぐ近くのように見えます。海はいつも、青くもり上がって見えます。遠くに見える二階建ての家の屋根も、高く見えます。時には、その上を海に浮かぶように漁船が通ることがあります。

また、よく晴れた日には、うす青く能登半島も見えます。海の水は、空も海も随分みえ

つては、自分だけの城です。横には、たみまつんでありますが、それがまたベツト加わりになっておきます。

わたしの部屋にあってあるものといえは、机と大きなスポンジのいすだけ、そして友だちといえは、くまとい、やうのぬいぐるみが、わたしの城の家です。さびしい城ですが、自分の部屋だと思つと、うれしくてなれます。

このへやに、おとといえは、おえさんのへやだったのですが、おとあやへのはからいで、わたくしが使うことになったのです。おとあやへには、おとあやへですが、わたくしはうれしかったです。

また、父に「おとあやの三じょうのへやをどうだい。いやだつたら二階にへやを作つて」といつたら、すな、このへやをいただいてののです。

いまは、すっかりおちつきました。とりもどし、へいおんですが、さみしくなつた時や、おる時になると、おえさんがこのへやにやつて来ます。それは、おねが願ったプレイヤーかおいてあるの、毎日のように聞くるのです。やっぱり、このへやにみえんがあるのです。

ところで、このへやをもらったわたくしは、一番うれしいのです。

中学生になったら、チヤックであける洋ダンスを買い入れ、にややかな城にしたいと思っています。

青い空の下、わたしの城は、いとも晴れていくように見えます。

波が荒いときには、青い色の中にならつたら、白い波がはうほうに見えます。

そのチヤックが多くなると、防波堤のりこえて、白いしぶきがまじりあがります。近くにある家が、一しゆんにしてまきこまれそうです。また、風がなくても白いものが見える時があります。よく見ると、それは船です。もっとよく見ると、あちこちに多くの船が見えます。なぶん漁船をしているのでしよう。

このような日は、とてもおもしろい日です。

このように窓から外の景色を見ていると、まるで動く絵を見ているような感じがします。ですから、ぼくは、さびしくなると、いつも窓から外の景色をながめるのです。

キャンプ

上島 はるみ

わたしたち五年生は、毎年の上流へキャンプにいきました。

朝の八時に、学校に集合しました。荷物を組合のトラックに積み、わたしたちはマイク口に乗り、小川橋を過ぎ舟見に着き、そこから山の谷あいを通るはのほりはじめ、三十分間で目的地に着きました。着くとすぐに、荷物をはこびます。それがおわると、本部作り、つぎに自分たちのテントを張りました。

それがおわると、とてもものがかわいたので、フ
ァンターをのびました。とてもおもしろいので、
休けい時間になりました。わたしは、友だちと
お話をしました。

川の流氷は早く、もつと上流のうへ行くと、友
だちがいて「キヤアーキヤアー」いってました。
もう夕方です。先生が、おぼんの用意をしな
いと言われたので、すぐにとりかかりました。
わたしたちのグループのこんだては、カレーライ
スで、作りおわるとすぐに食べました。
夜は、みんなで歌をうたったり、ランプをし
て遊びました。

朝おきると、まだうすうす、四時半でした。
先生が、「まだ早いですよ」と、いわれたので、
しばらくねました。
六時ごろ朝食のじゅんびに取りかかりました。
それがおわるとまた、友だちとお話をしました。
それから、キャンプファイヤーをすすために木
を拾いました。

夕方近くになったので、キャンプファイヤーを
しました。とてもおもしろいので、
さいごに、花火をしてねました。
いつの間にか、二泊三日間のキャンプも終りまし
た。
とても楽しいキャンプでした。この思い出は、
学校を卒業しても、心に強く残ることでしょう。

プラスチックについて、いろいろと説明がありま
した。
まず原料は、おもに石油、石炭を原料にして作
った白い粒に、熱を加えたり、冷したりして製品
を作り上げていくそうです。

おもに製品は、あたくしたちが使っている家庭用
品や日用品をのびます。これらの製品を作るのに二
種類の樹脂があり、一つは熱硬化性樹脂と熱可
塑性樹脂とがあります。

熱硬化性樹脂の場合は、熱を加えたり冷したりして
出来た製品は、もう一度熱を加えても、形を
変えることができません。しかし熱可塑性樹脂の場
合は、前者とちがって、出来上がった製品は、熱
を加えると、またすべなる形に変えることが出来ま
す。

一通りのお話しが終わったので、いよいよ工場を
見学することになりました。大きな工場の中で、
働いている人けが人だと思つていました。が、
聞いてみると、四百五十人だと言ふことでした。
最初に入った工場は、できた製品につける色を
作っていました。米つぶめようするものが、
二個を合わせたような形をしたものに入れると、
赤、青、黄やその他の色がでるそうです。同
じものから、いろいろな色がでるそうです。一
番ふしぎでした。
次の工場は、製品を作るときに使つた材料のよう

二十世紀の車

吉田 正弘

二十世紀の車は、今の車とちがって、ガソリンで走
りません。空気で走ります。

この車を名付けて「エアカー」といいます。
エアカーは、道から風を吸って、道を走る車です。
それから、この車は空も飛べるので空陸両用というこ
とです。ガソリンを使わないので公害問題もなく、ま
た、空とぶので交通手段もなくなり、とても便利で
す。しかも、この車の中には小さいながら、しん室
食堂はもちろめ、日用品もついていて、ちよとした
家がついている車です。

エアカーは、そうじゅうしなくてもよく、コント
ロールという所にある無線でそうじゅうするので、自
分行きたい所を言つと、ちやんと行くことができます。
こんな便利な車が日本の国内を自由に走っていると
思ひます。

シルバー樹脂KKを見学して 池原 常子

四月二十二日、わたしたちは遠足で水橋にある、
シルバー樹脂工場を見学しました。
外観は、とても大きな工場がたくさんうんでいて
、中からは機械の音があまり聞えないので、ちよと
意外な気がしました。
案内の人と大広間に入って、五十嵐課長さんから

な形をした白い物を作っていました。おくのうへ行く
と、ミルグコップやおわん、どんぶり、両手コップな
どたくさん作っていました。
最初に入った工場は、けんさきしたり、月のきやき
やきめをきくしたりしていました。月のきやき
やきめをきくところは、鉄製の円盤のようものが
回つていて、そのおまわり、さきへにのります。
けんさきの所では、ミルグコップを作っていました。た
は、いろいろなおわんと、一つ一つ調べるが、レッテ
ルを、一つ一つ作ります。

三つの工場を見学した後、また大広間へもどつて
はなしかつた。シルバー工場での製品の数、七十
種類、もうさうです。大広間のうしろの方に、製品
を見本がたくさんありました。
最後に、おみやげとして、べんとう箱をもらつて帰
りました。

七つだったおけあちやく 鍋谷 裕志

ぼくは、この六年間で一番面白い出来たことは、お
けあちやくができたことだ。
おけあちやくは、おけあちやくとしかりつたが、い
つもけあちやく、おけあちやくをもつてやすすぎし
て、おけあちやく、おけあちやくはあちやくの所へ、つ
いてくることがあります。
二月四日の月曜日、ぼくが一年生の時です。おけあち

中へ直して見たいと思っている。

このように直したいことを書いてきたが、下級生にはわかりにくいようにして行きたい。後、一年しかない毎日を送るべく過ごそうと思ひ張り切っている現在です。

立山ふきの見学

大田

毅

九月十八日の早朝六時四十分ごろ、ぼくたちは、おひい目をこすりながらバスに乗って一路、立山に向かいました。

しばらくたって桂台から有料道路に、バスがのり入れて、急な斜面を登り、トンネルにはいりました。ちよつと変わっていたのは、このトンネルの下部分に穴があいていました。

トンネルをぬけて下の方を見ると、道路が小さく見えるので、よく事故がおき多いものかと思ひました。峠名川にそって、美女平に着きました。

美女平に五分間ぐらい休けいしてから、立山に向かいました。立山杉、ブナの木、オデカンバなどの原生林を通っていくと、そこには雄大な雄名だきが四段になって落ちており、その雄大さのスリールの太さいことに感たんしました。

それから、しばらく行くと、また有料道路にはいりました。

晴天であると、薬師岳の頂上まで見えたはずな

のに、あいにくのくもり空でよく見えなかったのが残念でした。

午前十時頃になって、ようやく立山に着きました。バスから降りると、冷気が身体を包みこめる感じがする。うな寒さなので、びくびくしました。

整頓してから、立山のふもとふきを見学しました。まずはじめに、ふくりが池を見ました。

昔々としたうすきみかおる池でした。先生の説明によると、この池はむかし、立山がふんかした時、よく水をせきとめられてきた火山湖だそうです。

ふくりが池のふちを回って、下の方へおると、まるで、ゆでたまごがくさったような変なにおいがしてききました。これは有名をいづく谷でした。そこから、黄色のかたまりの中の穴のようなどころから、さかんに白い煙がでていました。変なにおいがしたのは、この白い煙のようなもの、つまり地中からふき出しているガスであることもわかり、黄色のかたまりは、いおうしであることも、あとでわかりました。

また、あちこちの水たまりにある水が、ぷつとうしっているのが、手をふいて見ると、とても暖かいので、これは温泉だと思い、理科で「火山と温泉」ということについて勉強したことが、実際に現れたり、さわたりすることができて、大変よかったと思ひました。

おながもすいてくろし、寒さむきびしくなったので、ふくりが池山荘で中食をとることにしました。大変寒いので、山川屋のおじさんに、ストーブを入れて

もらったので大助かりでした。

中食を食べてから雷鳥沢へ行きました。あちこちに、赤、黄のヤッケを着た登山客が見えましたが、ぼくたちは「ヤッホー」といって、声をかけると、向うから「ヤッホー」という返事が返って来りました。

山の天気が変りやすく、いま晴れていると思ひつてると急に、ガスがかかって、あたり一面真っ白になって見えなくなり、心細くなりました。

だんだんと帰る時刻がせまって来たので、立山ターミナルへいってバスに乗りました。

バスに乗った時は、おしやぶりでしかむがすがかり三メートル先が見えないほどでした。

バスは、ライトをつけのろのろ運転になりました。山の天気は、おそろしいものがあると知ると同時に、登山をする人達がそうなんなのも、このような状態になっておるのだと知りました。

立山学校での遠足もこれで終わりかと知ると、なんだかさびしいような気もしましたが、思い出として、一生忘れないうちにしよう。

卒業まじかになつて

藤田真希美

六年生の三学期 終りに近づき、いよいよ卒業まで後、わずかにになりました。

思えば、この六年間長いようで、すいぶん短か

かったように思われます。

遠足や、運動会なども、今になって見ると、なつかしく思われます。

一年生の時、運動会でわたくしは紅白レールの選手になって走ったことがあります。

その時、ころんだことも今になってみると、本当になつかしい思い出です。

遠足の前日の宿物は、とても楽しかったです。

このように、立山学校時代は楽しいことや、うれしいことばかりで、悲しいことがほとんどなかったように思われます。

キャンプの時の共同生活や部活動、クラブのけいけんを生かしてがんばりたいと思ひつています。

最後に、わたくしは、もう少し責任感の強い子にならなければならぬと思ひます。

卒業まじかになつて

松田 学

ぼくたちは、もうすぐ卒業して中学校へ入学する。

立山学校での六年間をふり返ってみると、さまざまなこととが頭に思い浮かぶ。

春休みの遠足や運動会、キャンプなど、多くの学校行事が思い出として残っています。

部活動や部活動の奉仕作業をしたことが、たいへんためになったと思う。

地区ごとに、プリントや、運動会のプログラムなど

を配ったので、一区とか二区とかか、どこからどこまでいっのかということもわかった。しかし、このように良い点もあつたが、学期始めや、年の始めに、目標を立ててがんばろうと決意したが、老志が衰へてきたせいか、いつか計画がおれになつてできなかった。もうすぐ入善中学校の生徒にふりかへる、あつたが、死んだ期間でせいせいといつぱいなんないと思つています。

水泳大会

塚東 美雪

わたしは、七月二十七日から三十日まで、横山プール、七月三十一日から八月五日まで入善市中央プールで毎日昼三時から水泳の練習をしました。

それは、八月七日に町民水泳大会に参るためである。

そのために練習もまじしかつた。足だけ使つたバタ足練習、手だけ使つたクロールの練習など四回から五回ほどの練習でした。

そして、最後に本番練習です。やはりやるほどタイムがよくなつていきました。

最初は、五十秒四だった。もう少しで四十秒台になるので、一往けん命がんばつた。

いよいよ、八月七日、待ちに待つた水泳大会

がやつてきた。わたしは胸がどきどきしていた。クラスのお友達や、お父さんに来ていた。

いよいよ、わたしの番になった。ビーと笛の合図でスタート台にのぼる。五十秒をきれたらと思った。

「ドーン」と、ビストルの合図で思い切つて、プールにとびこんだ。

わたしは、はじめからとはした。でもいつもより苦しくない。練習の仕かけがかなと思つた。最後は、できるだけ力を尽した。

タイムは「四十七秒七」。はじめて四十秒台に入つた。ただうれしかつた。

練習した結果が、このように良い結果になつたのだと、ただうれしかつた。

川岸時代時代の思い出として永く、心に残ることでしょう。

おはあちやんの病気

稲場 睦美

おはあちやんの腸のぐあいが、わるくなつて魚津の労災病院へ入院することにしました。

わたしは、はじめ何んとも思つていませんでしたが、おはあちやんの手術日が近づいてくるにつれて、心配になつて来ました。

それは、もし手術が失敗するかどうかと、いろいろなことを思い、いろいろなことを考えるようになりました。

いよいよ、手術の日になると、どうも落ちついてゐることができませんでした。

それから、しばらくすると手術は成功した。という、電報がかつてきたので、わたしは安心しました。

けれども、こんなおはあちやんが看病に行かなければならぬから、わたしはごんごんの用意をしなければいけなくなりました。

これからはじめのうちは、なにも思つていませんでしたが、だんだん日がたつにつれて、おはあちやんのありかたがわかつてきました。

このようなことで、おはあちやんという人は、大事にしてあげなくてはいけないものだと思つと同時に、親切にしてあげなければと思つています。

二十世紀の日本

鍋谷 昭仁

二十世紀になると、現在の日本はどうなつてゐるだろうか。

おそらく、現在の東京のような人口密度が日本中にできるのではなからうか。そうすると日本の人口は、おそらく現在の一億人以上が、何十倍になるかもしれない。

そうすると、住むところなくなる心配が、あつて来るので、海を埋めたてたり、山をけずつて

住居地にしなければならぬことになるのではないか。

すると、自然がこわされ、海が汚れたりして、公害問題がこり、現在よりやかましくなり、大きな社会問題に発展するおそれがあると思ひます。

また、このようなことは日本だけでなく、世界中が公害になり、最後には地球に生存する人間は少なくなり、動物や植物もなくなつて、死の世界になるのではなからうかと思ひます。

一方、交通関係はどうなつてゐるだろうか。

日本中に新幹線や高速道路があみの目のように、はびこり、旅行時間がすごく短くされて、北海道や九州まで一日で行つてくることのできるようになってゐるでしょう。

また、空の交通もみんなになり、大型の超音速ジェット機がとびかい、アメリカやイギリスなど自由に各国へ行くようになってゐることでしょう。

ところで、二十世紀にならぬ前に公害、住宅、交通などの問題を解決してから迎へたいものである。

卒業近くなつて

長島 修

長かつた六年間も、あつという間に過ぎ去つたといひます。

これから、大勢の仲間といひしよに入善中学校に入學しなければなりません。

ふり返って見れば、この六年間に自分は、いつ
たどんなことをしてきたのだろうか。
グラウンドにボールがころころついていても、知らな
い顔をして拾わなかったし、またろく下にゴミがお
ちていても拾いもしなかった。

こんなことでは、中学校へ入学する資格がない
ように思える気がしてなりません。
しかし、中学校へ行けば、今までのほくちが
つて、自分の考えをききさせ、少しづつ奉仕
して行きたいと思っています。

そうすれば、山学校の時のようにするい子には
ならないだろうと思うが、そうするにはかなりの
勇気がいるものである。
ほくち、この勇気を失わないで、いつまでも考
えをききさせ、奉仕していきたい。

卒業式が近づいて 青木 三恵子

もう数日で卒業するようになってきたけれど、も
ううれしいようないやうな感じがしま
す。

うれしくない理由は、中学生になったら帰りが
おそくなるし、宿題が多くなるし遊びもできな
くなるからです。

中学生になったら、はやく友達をつくって勉強
したいしうけん命やろうと思つた。

でも、死んでいった世末のあとには、山を芽
の赤ちやんがいつげいでくる。

これは、まるで人間社会と同じような感じがし
ます。いつしうけん命に、働いた大人もだんだん
と年とり、やがて死んでしまふ。しかし、心配
することはありません。次の世代をせめていく
子供がいて、大人が死んでいた文化を立派に受け
ついでいつてくれているからです。

一方、杉や松は一年中緑色をして、世末が落ちた
いので、いいなあと思つていました。
だから、お正月にやっても年をとらないように
、いついつまでも若々しくありたいという気持ちか
ら、かど松を立てるのをめと思つたりした。

こんなことを考えていると、いつのまにか夕方
になつていました。夕やけで西の空が真赤でした。
ふと上を見つと、柿の木が二、三枚のらひ
うと、わたしの足もとに落ちてきました。
なんだか、さびしい心さいだきながら家へ入
りました。

古い家 青木 三恵子

わたしの家は、大へんに古く江戸時代に建てら
れたのださうだ。

家の中を見ると、一番古い茶の間は、屋根はあ
るが天井ががない。そして、上の方はすすでま

卒業式が近くなると、することがいっぱいいて、とて
もいそがしくなる。勉強もしなければならぬし、よ
びがけや、歌の練習をしなければならぬ。
あとあつたので、くやみさしないうにかんは
ろうと心にちかっている。

秋の景色を見て 西島 晴美

秋もだんだんと深まり、自然界に生えている木々の
葉も色づきはじめました。そうして、冬が近づいてく
ると、これらの葉が全部落ちてしまい、わたしたちの目
を楽しませてくれたものと、おわかれし、やがて死は
だかになつて、さっふうけい自然にさるのだなると
思ふと、なんだかものさびしい感じがしました。

わたくしは、ま赤になつたもみじを見ていやから、
いろいろなこと思いました。

一年間の四季のうちで、秋は何かしらあわたたしく
過ぎていくような感じがしてなりません。

もうすぐくるさびしい冬にそぞろえるために、このよ
うな気がするのでしょうか。昼も短くなり、人間も
お正月を迎えるために、あんなに仕事に追われる季
節でもあるからでしょう。

また、なぜ葉が落ちるのだろうかと思ひます。葉が
おいていくことが、なんだかかわいそうに思つたり、世
にも一年という命だけで、一年たつと死んでしまふの
だなあと思つたりした。

つ黒けになつていく。

それは、すすの出ないストーブとちがつて、昔は木
炭や、まきとくべていたからであらう。

時々、その時代にたまたま、すすがたみの上にと
ちてくることがある。おそろしく今日の目までお盆やち
正月がくると、大さうじさしていたでしょう。それな
のに、すすが落ちてくることか不思議でなりません。
それから、家が古いせいかな、かたがっているのか、
中がうづかいところとゆるいところがある。

家の中は、昨生法があらうので、家の高きやかべ、
床などを直してもらつたが、かたがっている分だけは
ちよつともなからぬ。

しかし、部屋のなかべをぬつただけで、へやの中が明
るくなったような感じがします。

また、家の中には廊下が多く、たみめの部屋が多く
めんを十六字もある。やはり廊下が少ないと不便で
たみめの上を通っていくことばかりである。そのため
か廊下がありのたみめの部屋がある。

このように、古い家は欠点だらけですが、夏の暑い
日、家の中に入ると、とても涼しいので大変良い。

しかし、冬は寒いような気がする。それは、柱と戸
とかびりと合わぬので、そのすき間から風が通る
からかもしれない。

この家は、大変古いので、この中にいると昔の様子
がわかるような感じがします。

このように、この家は古くてきたないが、わたくし

は、すうだ。

それは、現在のうちに機械化がすすんでいかなかった時代に、このように大きな家を建てたためには大きな労力と力強さが、この家にあるように気がする。いく度かの戦争や地しん、洪水をのりこえてきたこの家は、何か宝物のような気がします。これから先、何十年、何百年ものりこえていつてほしいものだと思いをから、ながめました。

二十世紀の桐山

池原 彰夫

これから、ほくたちの力で造った桐山のお話としたいと思います。

今から、六、七十年前の川は、カドミウム、油などで川水がよじれ、ゴミを捨てて、魚は住めませんでした。

しかし、現在は昔のようなことがなくなり、川水は清らかに流れ、ゴミもなく二手のうちには、きれいな草花がいつぱい咲きみだれています。

川の中は水がきれいにすんでいるので、何万匹もの魚が楽しそうに泳ぎまわり、小学生や中学生が魚とりにも中になっています。

また、このきれいな川へ、いろいろな動物が水を飲みに行きつてくるし、緑色の葉をいつぱいつけ、木や川鳥がやってくる。美しい声でさえずっています。夏や冬になると、その季節にやってくる。

うに泳いでいます。

ところが、時々石を口に入れたり、はき出したことがあるとあります。石になにかついているのかと思って、手でさわってみると、ぬるぬるしています。

いっかテレビで、あゆは石についているけを食べて生きているというのを見たことがあります。した。やっぱり金魚もあゆと同じけを食べているのだなと思いました。なぜかという、山川へあゆつりに行った時、石がつるつるしていて、ころびそうになったことがあったからです。

また、金魚は水そうの中に生えている草を食べています。

また、金魚は水中の酸素が不足すると、死んだように動かないので、せん時エアーポンプを動かして空気を送ってやると生き返ったように動きます。

時たま、えさをやると、よろんで食べますが、小石をえさとまちかえたのか、口に入れてまたはき出しています。

金魚にとって、池もすいそうもかわらないようです。

家のねこ

須永 ゆう子

わたしの家には、ねこが三匹います。

る、つばめやかん、かものなどもやってきます。昔の桐山と比較して見ると、まるでおとぎの世界へ行ったような現在なのです。

一方、昔からあった国道八号線は、もう古くなり、今は北陸高速道路が出来ており、そこを通る車は、ソリン車でなく、みんな電気自動車です。しかも、これら自動車は、屋根にのった太陽電池で動くしかけになっています。

それから、家庭で使っている照明も太陽電池を使い、雨の日にはじゅう電して、太陽がでていなくてもバッテリーを使えばよいので、心配もありません。太陽電池は、家の屋根にたくさんならべておくのです。

このように、以前の公害にやせまされていた桐山は、今や自然の本来の姿さとりもとどし、住みよい桐山になっています。

わたしたち桐山の人の、ちえと努力によって生れ変わったのです。

金魚

稲場 晃

冬になり池の水が冷たくなったので、池から家の中の水そうに入れたやりました。

水そうの中にいる金魚のようす観察していると、いろいろなことがわかりました。

金魚は、えさをやなくても、いつもと変わらないよ

一ばん大きいねこは「じろう」といいます。

二ばんに大きなねこは、「パンダ」といいます。

三ばんは「しろ」といいます。

いつも、わたしが、学校から帰って来ると、パンダと「しろ」が、玄関の入口まで、むかひにきてくねます。その時、わたしは、大変うれしくなつて、「頭をかわるかをでやります。それで、毎日家へ帰るのが楽しみです。

しかし、困ったことに「じろう」だけは、親なので外へおそみを取りにいっているのか、姿を見せないの、ちよつとさびしいような気がします。けれど、じろうは、自分で見つけるために外へ出ていったのだとすれば、感謝です。

その時、わたしは、「じろう」は、まるで人間の世界では、大人の人達のように思われました。

ねこに、魚をやると、三匹でけんかをするので、わたしは、魚をやる時、さかきを一匹づつ配ってやりま

わたしは、三匹のねこが、だいすきです。

魚とり

神子沢 修

ほくの夏休みの思い出といつたら、鯉をつかみにいったことです。

鯉をつかむおもしろさは、やって見た人でないと味ををいおもしろさです。

鯉を取る方法は、手製の綱で、幅五の鯉、高さ二の綱ぐらいのものです。

綱を持つ人は二人で、川の流にあてると、他の一人の人が川上の才から鯉を追って綱の中へ入れて、捕えるといったもつとも原始的な方法なので、追う人は、たいへんつかれます。

綱に鯉が入った時は、ほくの一番しあわせな時だと思いました。

捕えた数は、だいたい、百ぴき前後です。中には、三十センチぐらいの大物もいました。

八月十五日 晴

午前十時ごろ、川にそって上流の方へ行つた時でした。橋がかかっている、なんどか鯉がいそうな気がして、のぞいてみると、白い変なものが右側の方にあつた。何んだらうと思つて、棒でつついたとたん、紅白の三役式鯉が、スットとのぼつていきました。

「とうちやん、でつかいがかつたぞう。」と、大きな声を出すと同時に、猛スピードで泳ぎはじめました。

ほくは、見えつたら大変だと思い、それから鯉とほくとの、かけくらべがはじまりました。ほくは走るのがおそいですが、この時はかりはまわり様子がわからないくらいになるまで走りつづけました。

とうとう、鯉は止まりました。

こうなつたら、もうしめたものです。

ほくは、おとうさんに、大きな声で「おうい、鯉がとまったぞ、綱をあててー」と、いいながら、こんどは逆に、鯉と綱の方へと走らせました。まっしぐらに綱に向つて、とびこんだ時は、とてもいい気持ちでした。

おとうさんとほくは、思わず顔を合せて、にっこりしました。

「文集 終」

「立山の歌」

立山の空に

そびゆる 雄々しさに

ならえと思ふ

みよのすがたも